

叶わぬ恋と知りながら

Nanao & Kanade

久石ケイ

Kei Kuishi



エタニティ文庫

目次

叶わぬ恋と知りながら

5

書き下ろし番外編
恋が叶ったそのあとは永遠の誓い

321

叶わぬ恋と知りながら

プロローグ

「カナちゃん、行っちゃヤダ……」
 物心ついた頃から、ずっと一緒にいて、大好きだった幼馴染のカナちゃんこと水城奏。彼の唯一の家族だった母親が亡くなり、遠い街の親戚に引き取られることになってしまった。

——それはわたしが十歳で彼が十四歳の秋のこと。
 ふたりとも早くに片親を亡くしていたせいか、お互いの寂しさがわかる、とても心の距離が近い相手だった。

わたしが五歳の時に母が亡くなったけれど、父とはその前から一緒に暮らしていない。父はわたしより再婚相手とその娘との生活を取ったから……

「ねえ、もう一度うちのおじさんに頼んでみようよ？」

身体の弱かった母に代わり、わたしをこれまでずっと育ててくれたのは母の兄にあたるおじ夫婦だ。

そしてカナちゃんはおじが監督を務める少年野球チーム〈ストライカーズ〉の一員で、おじの息子——つまりわたしの従兄と同じ年で仲がよく、わたしともよく一緒に遊んでくれた。彼の母親が夜遅くまで働いていたのもあって、家でご飯を食べたり泊まったりする家族同然の付き合いだった。

おじの家は元々チームの子やOBの人たちの出入りが激しかったし、誰かが下宿していることもあった。だからカナちゃんが中学を卒業するまでのたったの半年間。おじさんに頼めば、どうにかなると思っていたのに……

「監督に頼んでも無理なんだ。でもいつか——なな奈々がおとなになったら迎えに来るよ」
 「ホントに？」

それが本当ならどれほどうれしいことだろう。

わたしは泣きながらカナちゃんにすがりついた。

彼には異国の血が混じっていて、瞳を下から覗き込むと蒼みがかかったグレーに見える。

わたしはその瞳を見るのが大好きだった。

「だから泣かないで。奈々に泣かれるのが一番つらいよ」

彼はわたしの涙を指で拭い、おでこまぶたにやさしいキスを落とした。

わたしがちいさい頃はよくしてくれただけれど、いつのまにかしてくれなくなったおまじない。

「絶対……約束だよ?」

「約束するよ。だから、奈々のこのキスを僕に予約させて?」

そつとわたしの唇に触れる彼の指は長くて綺麗で……おとなの男の人みたいに思えた。「いいよ、カナちゃんなら……だからきつと迎えに来てね」

離れてしまうのは悲しかったけれど、彼がそう約束してくれたことがうれしかった。

だけどその後、彼からの連絡は途絶えた。

何度も書いた手紙は、いつしか宛先不明で戻ってくるようになってしまった。

わたしの一番はいつだってカナちゃんだったけど、四つ年上の彼からすればわたしはまだまだ子供で……恋愛対象にならないってことはわかっていたのに。

別れ際の約束がうれしくて……それからもずつと、馬鹿みたいに彼を待ち続けてしまった。

——あれから十四年。

わたしのファーストキスはいまだ、誰のモノにもなっていない。

カナちゃんのこととはとつくの昔に諦めて……

ただ、彼以上に好きになれる人ができなかっただけ。

そして誰とも付き合うことのないまま、わたしは二十四歳の秋を迎えた。

1 コネ就職の悲劇

「上野奈々生。来週から経営企画部へ異動してもらいたい」

お昼休み前、上司に呼び出され、突然言い渡された人事異動はあまりにも想定外すぎて……わたしの思考回路は思いっきり停止してしまった。

「はい? あの、わたしが……経営企画部へ、ですか?」

わたしが勤める網嶋物産は海外にも支社を持つ大手企業だ。

その会社の経営企画部といえば会社の中枢。高学歴でバイリンガルな総合職のエリート社員たちが多く在籍している。

そこに一般職で総務部勤務二年目のわたしが異動?

無名私立女子大学の国文学科卒業で、英語もともに話せないというのに!

「君には新しく就任する経営企画部統括部長のアシスタントに就いてもらいたい。なに、アシスタントと言っても語学力や専門知識は必要ない。スケジュール管理をする秘書の

ような仕事だ」

「統括部長といえはうちでは常務取締役が兼任するポスト、つまり重役になる。

「あの、それほどの大役でしたら秘書課の方が適任ではないのですか？」

わたしに秘書のスキルはまったくない。今までの仕事でも特別評価されるような活躍はしていないし、総務の仕事を無難にこなすのが精一杯だ。せめて容姿やスタイルがよければ今回抜擢された理由になるのかもしれないけれど、わたしの見た目は至って普通……だと思っう。

幼い頃からおじ家族などに『可愛い』と言われて育ったけれど、それは周りにいるのが男の子ばかりだったからだ。

その証拠にまだ男の人と付き合ったことがない。

恋愛らしき話は、初恋のカナちゃんとのことだけ……

それに、本当に可愛いというのはあの子みたいな娘のことを言うのだ。——父の再婚相手の娘、お人形さんみたいに可愛らしかった義姉。

「君は、海外事業部の綱嶋奏くんを知っているね」

「あ、はい。それはもちろんです」

綱嶋物産の次期後継者と言われている彼を社内で知らない人はいない。

子供のない社長夫婦が養子に迎えた甥で、アメリカの大学を出てMBAを取得後にこの会社へ入社。そしてある事件のあと、海外支社立ち上げのために二年前からドイツに赴任中だ。

わたしが入社した時すでに日本にいなかったもので、まだ一度もお目にかかったことはない。ただ、どうやらかなりのイケメンで仕事もできる人らしく、いまだに先輩方や女性社員の話に上がる。

射止めれば玉の輿だけど、残念なことにすでに婚約者ありだ。

「実は先日の役員会で彼が統括部長に就任することが決まってね。急ぎ帰国してもらうことになったが、彼のアシスタントを務める翠川くんは現地での引き継ぎのために残らなくてはならないらしい。彼が戻ってくるまでの間、君にアシスタントをやってもらいたい。なに、ほんの三ヶ月の間のことだ」

「あの、他に適任者がいらっしやるはずですよ。わたしでなくても……」

たとえ短い期間でも無理！ わたしにはそう言いたい事情があった。

「いや、君にしか頼めんのだよ。彼が海外勤務になった理由は、君も聞いたことがあるだろう？」

——確かにわたしも知っている。それは有名な話だった。

二年前、彼に好意を寄せていた同期の女性社員が社内でもカッターを振り回し、綱嶋さんに近づこうとした別の女性を切りつけたという。止めに入った綱嶋さんが軽い怪我をしたそうだが、危害を加えた社員というのが社長夫人の身内だったらしく、事件は公にならなかった。

それ以来、彼には女性の部下やアシスタントはつかなくなったと聞いている。けれど一応わたしも女なんだけど？ それはかまわないのかとツツコミたくなる。

「彼が君を指名したのだよ。その理由は君にも心当たりがあるはずだ」

「そ、それは……」

わたしは……それが理由で避けたかったのだ。

「君は、彼の婚約者である宮之原美麗さんの義理の妹にあたるそうだね」

そう、彼の婚約者はわたしの義理の姉。といっても、もう十八年会ってもいない。

闘病中の母と幼かったわたしを捨てて父が再婚した女性の連れ子、それが義姉だ。

再婚相手は大正時代から続く宮之原財閥一族の娘で、父とはその系列会社に勤めていた時に出会ったらしい。

母は産後に身体を壊し入院しがちだったため、わたしは小さい頃からスポーツ用品店を営むおじ夫婦に預けられて育った。

父は仕事が忙しく、たまにしか会いに来られないと聞かされていたけれど……本当は不倫し、彼女の家族と一緒に暮らしていたからだ。

そのうち相手の女性が妊娠し、お腹の子供を盾に離婚を迫り——病床の母はそれを受け入れたという。そして母は生きる気力を失い……しばらくして亡くなってしまった。

父は再婚時に宮之原の婚養子に入っており、現在はその系列会社の重役を務めながら、再婚相手と義姉、異母妹の四人で暮らしている。

わたしは父から養育費をもらっていたものの、ほとんど一緒に暮らしたことがない。ああ……こんなことなら、いくら卒業間際に内定先が潰れたからといって、長年疎遠

だった父に就職先を頼ったりしなければよかった。

宮之原系列でない会社を就職先にと頼んだ時、綱嶋のような大手企業を紹介してくれたいのは、実の娘に対してすこしでも愛情が残っていたからだと思っていたのに……かえって悪い結果を招いてしまった。

まさか綱嶋が義姉の婚約者の会社だったなんて！

そのことを知ったのは随分あとだったけれど、わかった時にやめておくべきだった。わたしを嫌っている義姉が、このことを知ったらどうなるのか……考えただけでも恐ろしい。

「とりあえず、明日から秘書課で研修を受けるように。連絡はしてあるから」

「そんな……」

「まあ、頑張りたまえ」

そう言い残し、上司はわたしに書類を手渡すとさっさと会議室を出ていってしまった。

どうすればいいのかな……。悩みながら職場へ戻るその足取りは重い。

「ただいま……」

すでにお昼休憩の時間に入っていたらしく、総務部にいるのは惣菜パンにかぶりついている同期の田原邦だけ。お弁当組のわたしは、いつも彼女と一緒にデスクでお昼を食べている。

「ちょっと、どうしたのよ？ 落ち込んだ顔して……なにかあった？」

くりくりした目を見開いて、心配そうにこちらに視線を向けてくる邦の表情はとて可憐い。

小柄で小動物のような彼女は、見かけによらず超積極的な肉食系女子だ。

わたしとは対照的な性格だけど、さっぱりしていて案外気が合っていた。

「どした、奈々生？ 悲愴な顔して」

わたしたちに声をかけながら総務部に入ってきたのは、四期上の真木理保子先輩。彼

女は入社当時わたしの指導社員で、仕事もできる才媛。この春から営業部に異動してしまつたが。

外回りが多く先輩もかなり忙しいようだけれど、彼女が内勤の時はこうして三人一緒にお昼を食べている。

「ちょっと上呼び出されてました……。先輩は午後から外回りですか？」

「今日はずっと内勤よ。それで、用件はなんだつたの？」

先輩は空いている席に座ると、テイクアウトしてきた食べ物の袋を取り出した。それを見てわたしも自分のお弁当箱を開ける。今日のおかずは昨夜おばさんが作ってくれたロールキャベツ。よく味の染みたそれを頬張ると、すこしだけ落ち着けた。

「実は……来週から経営企画部へ異動するようになって。新しく着任する統括部長のアシスタントに任命されたんです。なので明日から一週間、秘書課で研修を受けなきゃならなくて」

「なっ、奈々生が経営企画部へ……異動？」

「ええっ？ 嘘でしょ？」

ふたりには思いっきり驚かれました。邦は食べていたカスクートを喉に詰まらせるし、先輩は飲みかけていた珈琲を噴き出しそうになっていた。

「それで、新しい統括部長って……誰？」

「海外事業部の綱嶋さんです。社長の甥の」

「へえ、綱嶋さん帰国するんだ。アシスタントっていいなあ……。奈々生、絶対会わせてよね」

邦は単純によるこんでいるけれど、こっちはちっともうれしくない。

「綱嶋くんがそのポストに就くのはわかるけど、どうして奈々生がアシスタントに抜擢されるのよ？」

先輩と綱嶋さんは確か同期だ。黙っているわけにもいかず、とりあえず簡単に事情を説明した。

綱嶋さんの婚約者が義姉で、わたしはコネ入社だということ。

「それじゃ奈々生は宮之原のお嬢様だったの？」

邦が目をキラキラさせて聞いてくる。

「父が婿養子に入っただけで、わたしは宮之原とはなんの関係もないよ。それに……わたしは義姉に嫌われてるから」

「嫌われてる？ あたしと違って誰にでも好かれる奈々生が？」

邦が素っ頓狂な声で聞き返してくる。男性に対してかなり積極的な彼女は、同性からは少々煙たがられていた。わたしはいい子だと思っただけ。

「このまま義姉の婚約者のアシスタントになるわけにはいかないのよ。できるだけ早く

転職先を決めて、会社を辞めようと思つて……」

だって、義姉とは二度と関わりたくなかった。

就職当時はこんな因縁のある会社だとは露知らず、よろこんで仕事をしていた。先輩や邦と出会い、ずっとこの会社で頑張るつもりだったのに……社長の甥が義姉の婚約者だと知り本当に焦った。

ただ、義姉はここ数年海外で仕事をしていると聞いていたし、綱嶋さんも海外勤務中で顔を合わせる事がなかったため、つい彼が帰国するまでは勤め続けてもいいかと先延ばしにした結果がこれだ。

「なんで奈々生が会社を辞めなくちゃならないの？」

邦が訝しむのも無理はない。わたしと義姉にはそれほど確執がある。もつとも、わたしはなにもしていないけれど。

「それって、その女が昔……奈々生を階段から突き落としたことがあるから、だよな？」

「先輩、どうしてそれを？」

誰にもその話はしてないはずなのに……

「聞いたのよ、あなたの従兄から」

そっか、愼兄が先輩に話したんだ。それとも先輩が聞いたのかな？

あの事件のトラウマから、わたしは今でも階段を下りるのが苦手で、やたらと手すり

を持つ癖が抜けない。先輩はそれに気がついていたらしい。

——そう、あれは母が亡くなり一時期父の家に引き取られていた頃のこと。その時わたしは、しばらくの間ひとりでは階段を下りられないほどのトラウマを負った。なんとか手すりを持って下りられるようになったのは、一緒に階段を下りる練習をしてくれた四歳上の従兄の慎兄や、大好きだった幼馴染のカナちゃんのおかげだ。

十九年前……母が亡くなったあと、すでに再婚していた父はわたしを引き取るとおじたちを押し切った。だけどそれはわたしのためでなく、自分たちの世間体のため。

そのことをわたしは、すぐに思い知る。父は最初から他人行儀で、継母も義母も迷惑がっている態度を隠そうとしなかったから。

『わたしのパパなんだから、近づかないで！ あんたなんか早く出ていっちゃえ！』

引き取られたその日の夜、父のいない所で義母にはつきりとそう言われた。おじの家で周りにいたのは男の子ばかりで、わたしは義母ができることを密かに期待していたというのに、まったく歓迎されていなかったのだ。

病床の母に離婚を迫るような継母にしても、わたしをよく思うはずがない。それに継母は、生まれたばかりの異母妹のことで手一杯だった。

たまに父が早く帰ってきてても、義母がべったりくっついて近寄ることもできなかった。

確かに義姉はわたしより長く父と暮らしていたし、甘え下手のわたしより仲が良く、本当の娘のように見えた。

——本当はわたしのお父さんなのに……

悔しかったけれど、そう言いたくても言えないほど父と距離があった。

父だって懐かない実の娘より、見た目も可愛らしい義姉のほうがいいに決まっている。だからわたしと暮らそうともしなかつたし、会いに来なかつたのだろう。さらに今は、父と継母、ふたりの間にできた異母妹もいる。

それでも父が家にいる日はまだよかった。いない日は宮之原家の人たちに徹底的に無視される。

わたしが自室にいれば勝手にごはんがいらぬことにされるし、洗濯物を出せば捨てられていたこともあった。

『それ服だったの？ 雑巾かと思っただわ』

義姉はそう言って、おぼが持たせてくれた服を馬鹿にしてゴミ箱に捨てていたので。

彼女や異母妹はいつだって可愛らしくて高そうな服を着ていたから、それと比べれば質素だったのは事実。だけどその服はおぼが選んで買ってくれたものだったからすごくシヨックだった。

しかし義姉に捨てられたことを言おうものなら、継母に『美麗がそんなことするはず

ないでしょ!』と怒鳴られる始末。

わたしはその家にいるのが嫌で嫌で、おじの家に帰りたくて堪らなかつた。だけど、おじに『やっとお父さんと暮らせるのだから、可愛がつてもらうんだぞ』と送り出された以上、すぐに帰りたいとは言えなかつた。

もしかしたら、わたしが戻ると迷惑かもしれない……と思っていた。

そんなわたしが父の家にいられなくなる出来事があつたのは、そう——あれは母の命日に近い日曜日の朝だつた。

その日、父とわたしはふたりだけで母の墓参りに行くことになってた。わたしは、もしかしたら墓地でおじの家族と会えるかもしれないと密かに期待していた。

『奈々生、そろそろ出かけよう。車で待てるから早く下りてきなさい』

父に呼ばれ、二階の自室を出て階段を下りようとした、その時——わたしはいきなり誰かに背中を押された。

体勢を崩して落ちる瞬間、うしろに伸ばした手で掴んだそれと一緒に、踊り場まで転げ落ちた。

先についた左手から鈍い音がし……そのあとわたしの上になんか落ちてくる。

あちこちを酷く打つていたけれど、その痛みをすぐに感じることはなかつた。しばらくの間は頭の中が真っ白になっていたから……

『痛いよお! ママ、パパ!』

その声に驚き、ようやく目を開けると、泣き真似をしながらわたしを見下ろす義姉の姿が見えた。

『この子が悪いのよ! わたしを引つ張つたの……頭が痛いわ。いっぱい打つたのよ』
そう言いながら、継母に泣きつく義姉。

彼女の服をわたしが引つ張つた? 確かにそうかもしれないけれど、それはうしろから押された時に咄嗟に掴んだだけなのに。

『なんてことしてくれるのっ!』

身体を起こし『違う』と言いかけたその瞬間、継母が恐ろしい顔でわたしの頬を打つた。その勢いでふたたびうしろに倒れ込んだわたしは、またもや頭を床に打ちつける。

『美麗、かわいそうに……すぐに病院へ連れて行ってあげるからね』

痛い痛い泣き叫びながら、両親と車で出ていく義姉。誰もいない家に取り残されたわたし。

誰かに痛みを訴えることもできず、しばらくの間、呆然としていた。

時間が経つと左手首がジンジンと痛みはじめたけれど、怖くて動かせない。

『おじちゃん、おばちゃん……いたいよお……ううっ……うえっ……』

泣いて叫んでも助けてくれる人は誰もおらず、痛みはあとからどんどん襲ってきた。

帰りたい。おじの家に……
 そう思ったわたしは、動かない手首を抱えて家を出た。
 駅の方向もわからないまま、よろよろと歩き続ける。あちこちが痛くて、不安で、怖くて……嗚咽が止まらなかった。

——結局通りかかった人が、わたしの頬が腫れているのと、左の腕を抱えたままの
 を不審に思い、おまわりさん呼び……病院へ連れて行ってくれた。

『奈々生！ 大丈夫か？』

おじたちが駆けつけた頃には治療は終わり、わたしの左手にはギプスが嵌められていた。

家はどこかと聞かれ、わたしは『ウエノスポーツ用品店』と答えたから、おまわりさんがおじに連絡してくれたのだ。

『奈々ちゃん、痛かったよね？ だからあんな男のところへ帰すのは反対だったのよ！』

おばさんは駆け寄ると、わたしの腕を気遣いながら抱きしめてくれた。その腕の中は温かくて、止まっていた涙がふたたび溢れてしまう。

『いたかった……こわかったよお……うう……うわあーん！』

わたしは泣きながら必死で説明した。義姉にうしろから押されて階段から落ちたこと、

あの家でされた仕打ちのいくつかを。

『うんうん、奈々生は悪くなんかないよ。こんな目に遭って……かわいそうに』

『かえりたい……上野のおうちにかえりたいよ』

『ああ、帰ってこい。もう二度とあんな家に返すものか！』

おじもそう言ってくれて、ようやくわたしは安心することができた。

わたしは全身打撲で、頭部に瘤ができ、左手首の尺骨が折れていたが、脳波に異常はなかった。踊り場のある階段だったのと、子供で身体がやわらかかったのが幸いしたようだ。そうでなければと考えるとゾツとする。

一方の義姉はいくら検査しても瘤すらできていなかったそうだ。わたしの上に落ちたのだから、酷くないのはあたりまえ。それなのに大騒ぎし、病院でも首を傾げられ……自宅に戻るとわたしはおらず、玄関のドアも開きっぱなし。警察から呼び出されて義姉の嘘はバレ、父たちはわたしを虐待していたという疑いをかけられたらしい。

大事にしないでほしいと、父はその日の夜遅く頼みに来た。しかし謝罪してほしいというおじたちの要望に反して、義姉はわたしを突き落とすことを認めず、継母が謝りに来ることもなかった。そのため、おじと父……というよりも宮之原側はかなり揉めたらしい。

おじたちは児童虐待で訴えてでも、わたしを養女にして正式に引き取りたいと交渉

したそうだけど、世間体を気にした父はわたしを養女に出すことを拒否。そのうち宮之原側からおじの営むスポーツ用品店に圧力がかけられ……随分と騒がしかった記憶がある。

結局謝罪はなし、慰謝料を含んだ養育費を一括で払うことで話がつき、わたしはおじたちのもとで暮らすことが決まった。

わたしとしてはあちらの家と縁が切れるなら、それでよかった。

「なにそれ……酷すぎっ！」

話し終わると、さっきまでわたしが宮之原の娘だと羨ましがっていた邦の態度が一変していた。

もつとも、母が父と離婚した際、わたしは母を筆頭とした上野の戸籍に入っている。

父はわたしを置いて宮之原の養子に入ったので、わたしは宮之原の籍には入っていない。「人の父親を奪っておきながら偉そうに！ 怪我までさせて嘘つくなんて最悪の女じゃん。いくら子供の頃の話でも、そんな女選ぶなんて綱嶋さん最っ低！ なんか彼の株が下がったわ。むしろ軽蔑するよ」

酷い言われようだけど、実はわたしもそう思っていた。

あの義姉を選ぶなんて……いくら評判のいい人でも、それだけで好感は持てない。

「だから、綱嶋さんが帰国する前に辞めようと思って……」

「なんで？ そんな女のために奈々生が会社を辞めることないってば！」

邦はかなり怒り心頭だ。

「でも義姉とはできるだけ関わりたくないの。それなのに今回の人事には面食らっているよ。義姉とわたしの因縁を知らないにしても唐突すぎて」

「それならいっそのこと、直接彼に事情を話してみたらどう？ 大丈夫。綱嶋くんは話のわかる人よ。それは同期のわたしが保証するから」

なるほど、直接ね。ここは本人を知っている先輩の意見を聞くのが得策かもしれない。「へえ、センパイがそこまで言うことは、綱嶋さんって噂通りのイイ男なの？ もしかしてセンパイと艶っぽい話とかあったりして？」

「邦、それはないわ。確かに彼は綺麗な顔立ちをしてたけど。ちょっとデキすぎてて胡散臭いというか、本心が読めないところのある男だったからね」

「センパイのタイプじゃなかったってこと？」

「あら、観賞用としては最高よ。物腰がやわらかくて、スリーピーススーツの似合う細腰の肩幅がある体型だね。さすがに入社当時はオーダーメイドは着てなかったけど、それでもかなりいいスーツを着てたと思うわ」

はじまっちゃった……先輩のスーツ萌え談義。

クールでカッコイイ先輩なんだけど、スーツ萌えがすごくて、その審美眼はかなり鋭い。

そんなよそこのスーツでは萌えないどころかダメ出しがはじまる。先輩曰く、日本のビジネスマンはスーツのセレクトが下手なんだって。少々お腹が出てても、体型に合わせてピッタリに仕立てたスーツはその人に合っていて、それも萌えるらしい。

「センパイ、スーツが似合っても奈々生にとっては憎つき義姉の婚約者なんだから！ なにか対策を考えなきゃだよ」

「そ、そうね。とりあえず奈々生をアシスタントに指名した理由を直接聞いて……すぐに辞めるなんて言わずに、総務に戻してもらえよう掛け合ってみたらどうかしら。もしすぐに戻れなくても、本来のアシスタントの翠川くんが帰国するまでの三ヶ月間だけなら大丈夫じゃない？」

「そうですね……別に綱嶋さんに対して文句はないし。ただ、義姉と関わり合いたくないだけだから。義姉がまだ帰国しないのなら、なんとかなるかもですよ？」

話してみる価値はあるかもしれない。それに一週間で転職先を探すのは難しすぎる。

「そうそう。もしかしたら奈々生の話を聞いて、婚約破棄になるかもしれないしね！」

邦、怖いこと言わないで。そんな幼い頃の話で破談になったりしないと思うよ。義姉もそれなりに成長しているだろうし。

「それじゃ、直接話してみます。ただでさえおじの世話になりっぱなしで、いきなり無職になるわけにはいかないですから。いつかひとり暮らしするためにも……」

本当は就職したらずぐにでも、おじの家を出て独立するつもりだった。それなのに、先に慎兄が家を出てしまっ、出たくても出られなくなってしまったのだ。

『お願いだから家を出るなんて言わないでちょうだい。慎一がいなくても寂しいのに、奈々ちゃんが出ていくなんてダメよ！ あなたはずっと、この家においてくれないか』おばに泣きつかれて、しかたなく家を出るのは諦めた。

幼い頃から育ててくれた彼女に懇願されては逆らえない。本当の娘じゃないけれど、一生面倒を見るつもりはある。それほど、おじたちには恩を感じている。

ただ、慎兄が結婚したらいずれは同居するだろう。あれで親しいところがあるし、その時に実の妹でもない小姑なんて邪魔なだけだ。それまでには家を出たほうがいいと思っているけれど。

「奈々生は気を使いすぎだよ。それだけ苦労してきたんだらうけどね……」

先輩がしみじみと言いながら、ギュッと抱きしめてくれた。

「そんな、たいした苦労してないですよ。養育費はもらってだし、大学まで出してもらえたんですから。おじやおばもやさしくて、本当の娘のように育ててくれて……きっと、父に引き取られるよりもずっと、しあわせだったはずです」

おじたちからは本当の娘になってほしいとも言われている。それも養女とは違う形——つまり慎兄のお嫁さんとして。

「辞める辞めないは綱嶋くんと話してからとして、あとは明日からの研修をどうするかね。なにか言われている？ 服装とか」

「制服じゃなくてスーツでって言われています。だけど、どんなスーツを着ればいいのか……」

総合職の女性は、わたしたち一般職のように制服ではなく基本スーツだ。真木先輩も、今日ほかっこいいパンツスーツ姿。秘書課の社員たちは、他の総合職の人たちのようなシンプルなスーツではなく、華やかなものを着ていることが多い。わたしがそんな服を持つているはずもなく、入社式に着たりクルートスーツを引っ張り出してくるしかないと考えていた。

「それじゃ、明日の研修までにいろいろと準備しなきゃね」

「いろいろとって？」

先輩が思いつきり楽しそうな顔をしている。彼女がこういう顔をするのは、なにか企んでいる時で……

「そうね。総務課の上野奈々生はこれでいいけど、重役のアシスタントになるなら、もうちよっと頑張らないとね」

「えっ、なにを頑張るの？ 邦」

ふたりがニッコリ笑って、にじり寄ってくる。

「邦、今日の終業後は緊急ミツションよ！ 奈々生を変身させるからね。研修先の秘書課の気取った女どもに、わたしたちの奈々生を馬鹿になんてさせないんだから！」

気持ちほうれしいけど、それは無理じゃないかな？ だって素材がモノを言う部分が大い。

「まあ任せておきなさいって。綱嶋くん好みに仕上げてあげるから」

別に綱嶋さん好みじゃなくても、抵抗したけれど……

閉店間際のセレクトショップに連れて行かれ、スーツや靴など一式揃えることに。バッグは先輩が使わなくなったブランド物を異動祝いだと言ってプレゼントしてくれた。だけどそれ以外の準備で夏のボーナスが半分以上飛んでしまった。

それから更に先輩の知り合いの美容師さんに頼み込んで、髪型を変えてもらい、化粧の仕方も教わった。

まあ、外見が変わったところで中身まで変わるわけじゃない。ただ鏡の中の自分はちよつぱり以前と違って華やかで、お嬢様っぽく見えてくすぐったい。

「ここまでしなきゃダメなんですか？ 先輩」

「ダメよ。奈々生はただでさえ自分に自信がないからね。今のまんま出向いても、萎縮するだけでしょ？ それが目に見えるから、ここまでするのはよ」

確かに、コネ入社なうえに一般職のわたしは総合職の私服組に引け目を感じていた。元々容姿に対してのコンプレックスもあったが、それは可愛らしかった義姉に父親を取られたのが原因だ。

その義姉を選んだ婚約者に会うことに対して、気後れもかなりある。だけど今の自分なら、すこしだけ大丈夫かなって思えた。

「やれるだけのことをやって挑むのみよ。奈々生は頑張り屋だし、仕事についてはわたしが入り込んでやらせてあげようよ。自信持ちなさい！」

確かに先輩には、かなり鍛えてもらった。新しい仕事を教わって頑張ればいだけだ。見た目をこうして整えれば、なんとかかなりそうな気がしてくるから不思議。

「そうそう。この勢いで合コンも行っちゃおうよ！ 奈々生ったら、合コンも紹介も苦手だって逃げてるけど、いい加減、初恋の君のことは忘れなきゃ。初恋は叶わぬものって言うでしょう？」

「それを言うなら、実らぬものよ、邦」

「やだな、ふたりとも。もうとつくに諦めてるし、合コンや紹介は苦手なだけだよ……」付き合う相手を品定めするのは嫌だし、誰かと付き合いたいと思わなかった。

だけど邦や先輩には、初恋の相手が忘れられないからだと思われている。酔った勢いでカナちゃんのことを話したのは失敗だったかもしれない。

「誰とも付き合わないなんて、可愛いのもつたないよ？ 奈々生」

「先輩まで……可愛いなんて言ってくれるのは、身内と先輩たちだけですよ」

それに……わたしの場合、彼氏を作らないんじゃないかと作れないだけ。そういう機会もないし、自信もない。実の父親にすら選ばれなかったのだから。

カナちゃんもきつと、別の人を選んだんだ……だから手紙の返事もなく、迎えにも来ないんだ。

——人を好きになるのが怖いかもしれない。選んでもらえなかったら、行き場のない想いを抱えてつらいだけなもの。

2 再会は突然に

それからの一週間は秘書課で猛特訓を受けた。

たとえ経営企画部所属でも、スケジュール管理等では秘書課と連携しなければならぬからだ。

研修内容は、挨拶あいさつの仕方や電話の取り方、スケジュールの調整法など。服装や身だしなみは先輩と邦の協力で及第点をもらえたけれど、美しいお辞儀じぎの仕方やお茶の出し方など、秘書課ならではの作法まで厳しく叩き込まれて結構大変だった。

そのうえ秘書課のお姉さま方の視線はたいそう冷たく、嫌味や皮肉も言われた。

皆が密ひそかに狙ねらっている若きイケメン後継者のアシスタントに指名されたのが、わたしでは誰もが納得しないのだ。きつと義姉あねのような人でなければ……

けどどなにを言われようと頑張るしかなかった。応援してくれる先輩や邦に申し訳ないもの。

「午前中だけって思ってたのに……夕方になっちゃった」

週末、残った仕事と渡された資料を整理してしまふように言われ、日曜まで出勤しなければならなかった。

誰も教えてくれる者がおらず、結局予想以上に時間がかかり、夕方近くに。

ようやく仕事を終え、家の最寄もより駅から商店街の中にある自宅へ向かう。住居を兼ねたおじの店にきたお客様きやくの邪魔にならないように、裏手にある駐車場側の出入り口に回る。

日曜のこの時間帯なら、おじの指導する少年野球チームの練習も終わり、コーチャやOBたちが店にたむろしている頃だ。今日はその相手をするのも疲れる……

「あれ？ 誰だろう……」

駐車場には見慣れない白い車。よく見ると従兄いとこの慎兄しんが乗っている逆輸入された日本の高級ブランド車と色違いだ。

わたしが近づくと、車の中から背の高い男性が降り立つ。

ラフなジーンズにジャケット姿。サングラスをしているので顔はよくわからないけれど、その姿を見ただけで懐かしいような、キュッと胸が締めつけられるような痛みを覚えてた。

まさか一目惚ほれ？ いやいやあり得ない！ だってそんなものしたことがない。だけど、なぜだろう？ はじめて見た気がしない……

わたしはその人から目が離せず、その場で立ち尽くしていた。

「奈々……？」

すこし低くて甘い声がわたしの名を呼ぶ。

この声はまさか……？ それなら、さつき胸がキュッとしたのも納得できる。だって、どれだけ年月が経っても彼に逢えばすぐにわかると思っていたから。

ずっとずっと逢いたくて逢いたくて堪たまらなかったその人……

「——カナちゃん、なの？」

サングラスを外したその顔には、別れた頃の面影おもかげがあった。

整った顔立ちにシャープな輪郭。なのにやわらかい雰囲気を感じるのは、やさしく笑う表情と、青灰色の瞳のため。

その瞳は光に透けると水晶のように綺麗で、わたしは幼い頃からそれを覗き込むのが大好きだった。薄茶色のやわらかそうな髪が夕日を浴びてきらめいて見える。

「ああ、そうだよ。僕の奈々……逢いたかったよ」

微笑みながらやさしく語りかけてくるこの声。昔よりも低くなっているけれど聞き覚えがある。それに、話す時の独特のイントネーションは間違いなく『カナちゃん』のものだ。

「カナちゃん！」

わたしは思わず駆け寄り、彼の腕の中に飛び込んだ。

ぎゅうつと抱きつくときそれ以上の力で抱きしめ返され、伝わる温もりで実感する……ああ、カナちゃんだつて。

だけど頬に押しつけられた彼の衣服から香るのは、すこしスパイシーで甘い大人のフレグランス。

子供の頃、抱きついて甘えた時にTシャツやユニホームからした土埃や汗の匂いはもうしない。

「わたしも……逢いたかった」

——ああ、そっか。わたしは諦めたふりをしていただけで、ちっともカナちゃんのこと

とを諦めていなかったんだ。

ずっと好きなままで……そのことを忘れようとしていただけで、彼のことをずっと想い続けていたのだ。だからカレシが欲しいとも思えなかったし、好きな人もできなかった。再会しても、思い出の彼と現実の彼とのギャップにショックを受けるかもしれないと予想していたけれど、実際は幻滅するどころか想像以上に素敵な男性に成長していた。

その声もやさしさも全部昔のままで……わたしの心の中の幼いカナちゃんがいた位置に、ストンと今の彼が居座ってしまった。

でも、目の前にいるのが本物のカナちゃんだったら……どうして今まで連絡のひとも寄越さなかったの？

これまで一度も会いに来てくれなかったのに、どうして今更？

そのことを考えると、寂しさや怒りのようなものが込み上げてきた。それは涙になっ
てみるみるうちにわたしの瞳から溢れていく。

「なんで泣くんだよ？ あれからずっと、奈々が泣いていないか心配してたのに……」

彼はわたしの頬を両手で挟み込み、親指で涙を拭き取りながら困った顔をしていた。

「それじゃ……どうして今まで、連絡してくれなかったの？ 手紙も返ってくるから、どこにいるのかもわからなかったんだよ？ それなのに、こっちの気も知らないで……なにが『心配してた』よ！ カナちゃんの馬鹿……馬鹿っ！」

ドンと拳こぶしで目の前の彼の胸を叩いた。何度も、何度も、泣きじゃくりながら……

「連絡したよ」

「嘘！」

知らない、そんなの一度も聞いてない！

「嘘じゃない。何度か電話したし手紙も書いたよ」

そんな……おじたちからは、電話も手紙も全然ないと聞かされていたのに？

「ごめん、心配かけたよな？」

カナちゃんはポンポンとわたしの頭を撫で、ふたたび頬に手を添えると愛おしげに撫でてくる。

顔を歪ゆがめながら微笑む彼は、この街から出ていった時と同じ表情をしていた。なによ、そんな顔されたら全部許しちゃうじゃない。

「元気にしてたのなら、いいよ……」

「やっぱり奈々はやさしいね。ずっと僕のことを待っていてくれたの？」

——迷ったけれど頷いた。だってカナちゃん以外の人なんて考えられなかったから。

「今、誰か付き合ってる人はいる？」

「いないよ……誰とも付き合ったことないよ」

「本当に？ それじゃ、あの約束……守ってくれてたんだね」

とつくの昔に諦あきらめてて、約束を守ってきたわけじゃないけれど……誰ともキスしたことがない。

「ありがとう！ うれしいよ、奈々」

ふたたびギュッと抱きしめられた。

「そう言うなら……カナちゃんは、今までなにしてたのよ」

見上げると、カナちゃんの青灰色の瞳にわたしの顔が映る。

わたしの唇をやさしくなぞる彼の指も、泣きそうに微笑むその顔も全部あの日と同じで……

幼い頃は平気だったのに、懐かしさと同時に気恥はずかしさが込み上げ、動悸どうきが激しくなる。

「……そんなに可愛い顔するなんて、反則だよ」

可愛いと言われて慌うろてて俯うつむく。だって、自分が可愛くないなんて百も承知している。

こんなに素敵な男性になった彼は、今のわたしを見てがっかりしていないだろうか？ そう思うと、いたたまれなくなってしまう。

それなのに彼はわたしの顎あごを持ち上げると、ゆっくりと顔を近づけてきた。

「奈々、逃げないで……」

信じられないほど近くに見えた、彼の綺麗な青灰色の瞳。

気づいた時には、わたしは目を閉じることなく、それを受け止めていた。

「……っ！」

啄むように触れ、やわらかく温かな感触を残し離れていく彼の唇。

——これがファーストキス？

二十四歳にしてようやく経験したそれはあつという間で、だけどその感慨を噛みしめる暇もないほど強く抱きしめられた。

「奈々……やっとなえに來ることができたんだ。もう、誰にも邪魔はさせない」

耳元でカナちゃんが甘くそう言うけど、誰が邪魔するというの？

「あ、おばさんから電話」

ポケットの中の携帯が震えた。電車に乗る前に連絡していたのに、なかなか帰らないのを心配してかけてきたのだろう。

「もう、おばさんったら、本当に心配症なんだから」

すこしでも帰りが遅いと、こうして連絡してくる。これでも、仕事をはじめてからはまだ自由が利くようになったほうだ。ちよつと過保護すぎると先輩たちには言われるけれど、ここまで育ててもらった恩があるから、あまり強く反発できなかった。

「ねえカナちゃん。今からうちに寄っていくでしょ？ おじさんたちもきつと会いたがるよ。慎兄は駅前のマンションでひとり暮らししてるけど、近くだからすぐに飛んで來

ると思うの」

「いや、いいよ。きつと僕は歓迎されないから」

それって……やっぱり邪魔をしたのはおばたちだと言うの？

そんなことあるはずがない。おじもおばも、あれほどカナちゃんのことを可愛がっていたのだから。

わたしが物心ついた頃から、慎兄とカナちゃんと三人でいつも一緒にいた記憶がある。わたしには両親との思い出はほとんどなく、季節ごとのイベントは、カナちゃんを含む少年野球チームのメンバーと一緒にが多かった。

おじが経営するウエノスポーツ用品店でスポーツ・レジャー用品などを貸し出していた関係で、お得意さんやチームの子たちを対象にしたいろいろな催し物をやっていた。

春の花見に夏のお祭りや花火、海や山に、海水浴にキャンプ。秋はバーベキューに山登り。冬のスケートにスキー。

家族がいれば当然一緒に過ごすはずのクリスマスや初詣も……長い夏休みも冬休みも春休みも、他に行くところのないわたしとカナちゃんは、慎兄と一緒にうちで過ごすことが多かった。

おじたちからしても、カナちゃんは家族同然のはずだったのに……どうして？

「今日はもう帰るよ。またすぐに逢えるさ。それから……今日のことはまだ誰にも内緒だよ。また改めて挨拶に来るから、いいね?」

その真剣な物言いに思わず頷くと、ふたたび唇にちいさくキスが落とされた。

「それじゃ、また」

彼はそう言つて車に乗り込むとエンジンをかける。

そのエンジン音は静かで、発進する時も砂利を踏む音だけ残り走り去っていく。

わたしはキスの余韻を噛みしめながら、車のテールランプをいつまでも見送っていた。

「ただいま」

「おかえり、奈々ちゃん。晩ごはんできてるわよ」

「あ、はい。それじゃ着替えてくるね」

部屋に入つてからも、ぼんやりとカナちゃんのことばかり考えてしまう。

結局、今まで彼がどうしていたのか、教えてもらえなかった。

連絡先すら聞かせてもらえなかったのって、もしかして騙されてる? 本当はすでに

結婚してて、連絡されたら困るとか? まさかとは思うけれど、そんな不安がよぎつてしまう。

ただど一番シヨクなのは、こんなにやさしいおばがカナちゃんからの連絡を取り次

いでくれなかったかもしれないこと。わたしがどれほど寂しがつていたか、知っていたはずなのに……

「よお、遅かったな。もうすこしで会社まで迎えに行かされるところだったぞ」

「慎兄、帰つてたの?」

きつい目をした従兄が、居間に寝っ転がったまま、迷惑そうにわたしを見る。どうやら今日はデートがなかったらしく、晩ごはんを食べに来たようだ。

「慎兄になら話してもいいのだろうか? カナちゃんが来たことを。」

「奈々ちゃんが日曜出勤だなんて! 今までなかったのに、あの娘の嫌がらせじゃないの? 早く辞めちゃいなさい、そんな会社」

「おばさん、今日の出勤は義姉のことと関係ないから」

今回異動の辞令が下りた時、転職するかもしれないことを伝えていた。その時はじめておじたちに、綱嶋物産は義姉の婚約者の会社であったことを打ち明けたのだ。そして今回、彼のもとで仕事をすることになったと。

「そうだぞ。無理しなくていいんだぞ。嫌ならいつでも仕事を辞めろ」

「もう、おじさんまで……」

その話を聞いた時のおじたちはかなり激昂して、すぐにでも仕事を辞めろと言いはじめた。とりあえず転職先を探してからというわたしの言葉で矛先を収めてもらった。

「まったく酷いものね。友嗣ともちかさんったら、とんでもない会社を実の娘に紹介して！」
おぼは父のこととなると昔からボロクソだった。

「おふくろ、網嶋は大企業だぞ？　むこうが奈々生の素性すじょうに気づかなければどうにかなったさ」

「ただ指名されたということは正体がバレてしまったのだ。」

「奈々ちゃんも黙ってないで、すぐにわたしたちに言ってくれればよかったのよ。それで家を手伝ってくれれば……」

おぼは昔から、やたらとわたしを手元に置きたがり、いつも必要以上に目をかけてくれていた。そのため慎兄はかなり寂しい思いをしていたらしい。時々慎兄がわたしに意地悪するのは母親が自分より可愛がっているように思うからだど、カナちゃんが教えてくれた。それからはできるだけ気を使うようになった。意地悪といっても義姉あねにされたことに比べると可愛らしいものだったし。

それに父の家から帰ってきてからは、まったく意地悪されなくなった。きつと彼なりに気を使ってくれたのだと思う。

「だからかな？　慎兄が先に家を出たのは。わたしが遠慮なくこの家にいられるようになって。」

「だけど将来慎兄が結婚して、お嫁さんが来たら邪魔になる。その時は……わたしが出

ていかなければならない。

「奈々ちゃんは無理しない方がいいのよ。いざとなれば慎一が面倒見るって言ってるんだから」

「慎兄はその気もないのに冗談で言ってるだけだから。信じちゃダメだよ、おぼさん」

「まだ言ってる……。二年前、就職先が潰つぶれて途方にくれていたあの時、慎兄がいきなりそんなことを言い出したのが、この誤解の元だ。」

『就職が決まらなくても、おまえひとりぐらい俺が養ってやるよ。俺の嫁になればおまえもこの家を出なくていいし、ずーっとこのうちの子でいられるぞ』

「今まで一度だってわたしを女扱めあつかいしたことなくせに、突然そんなことを言い出した慎兄。」

「一番よろこんだのはおぼで『まあ、よかったわ！　これで奈々ちゃんは一生わたしの娘ね』って目を輝かせ、おじも『おお慎一、やっとその気になったか』と……」

「それ以来おじたちは、わたしが慎兄と結婚して正式にこの家の嫁になることを楽しみにしている。」

「だけど、わたしにとって慎兄は兄以外のなものでもない。いくら従兄妹いとこ同士は結婚できると言っても、兄妹同然に育ってきて今更いまさらって感じた。」

それならもっとちいさいうちに養女になって、おじたちの本當の娘になりたかった。なのに、せけんてい世間体を気にした父たちに阻はまれた。

だけど上野の姓を名乗っていたので、言わなければ誰もわたしがこのうちの子じゃないなんて思わなかった。成人した今となっては、どちらでもいいこと。そんなものがないことも、わたしたちは本物の家族のはず。

それに……カノジョがいるのに、そういうことを言っちゃダメだと思っよう慎兄。

高校の時も大学の時も就職してからも、いつだってカノジョがいたくせに。女を切らしたことがないっていうのが彼の自慢だ。就職して会社の近くにマンションを借りたのだから、女の人を連れ込むため……その現場、何度か目撃してるんですけど？

そのことを言うと『結婚してから浮気しないように今のうちに遊び倒してただけだ』と聞き直る。

いやいや、意味がわからないから！ 自分は遊びまくっておいて、わたしには『おまえは遊ぶのナシな』なんて不公平じゃない？ 飲みに行くのはストライカーズのチームメイトや会社の先輩たちじゃないと許可してもらえないのだから。

まあ今のところ、別にそれで不自由はしていないけれど。

そもそもわたしが気軽に男性と付き合えなくなったのは慎兄の影響だ。

中学の野球部を引退して髪が伸びはじめると急にモテだした彼は、やたら遊ぶように

なった。高校で野球部に入らなかったのも『坊主になるのがいやだから』という理由で、それからはとんでもない軟派なまはぶり。

付き合った女性は数知れず。どれだけ遊び人かっことは、わたしが一番良く知ってる。

その気がありそうな子は必ず口説く。自分にカノジョがいても、相手にカレシがいてもだ。

慎兄が男の本性と実態をまざまざと見せつけてくれたせいで、気軽に男の人と付き合い気になれなくなったと言っても過言ではない。

一生を共にするのなら、できればわたしだけを大事にしてくれる人がいい。慎兄も妹としては文句なく大事にしてくれているけど、カノジョや奥さんなんて御免ごめんだ。

こうして現実の恋愛から目を背けてきたわたしにとつて、カナちゃんはずっと別格だった。想い出の中の彼は王子さまで、汚けがれなき存在だったから。

それに……夫婦になるってことは、アレでしょ？ キスとか、それ以上のこともするんでしょ？

無理無理、絶対無理！ 慎兄とは今まで一度もそんな雰囲気になったことがないし、考えたこともない。それに、キスはやっぱカナちゃんとかいいな……なんてね。

ダメだ、さっきのキスを思い出して顔が火照ほってくる。

「俺は別にいいぞ。おまえなら気心が知れて、嫁姑問題もクリアしてんだから」
 「わたしが良くないってば！ 慎兄にとつても、ありえないでしょ？」

「こんないい男を前にしてなに言っただ、カレシがいたこともないくせに……。ああ
 そうか！ 俺が近くにいるせいで他の男なんて霞んで見えて困ったよな。悪かった」

「どこにいい男がいるっていうのよ？」

「ここにいるだろうが！ まあ、男を見る目だけは教育しておいてやったからな。今まで彼氏ができなかったのは、俺以上の男がいなかったってことだろ？」

確かに一部の女性から見れば慎兄はイイ男かもしれないけれど……

「どうやったらずこまで自惚れられるのよ。慎兄は兄貴、それ以外のなものでもないよ」
 偉そうだしワガママだけど、いざという時は助けてくれるし頼りにもなる。だけどわたしにとつて、すでに家族だ。もし夫婦らしいことをしなくてもいいのなら、一緒に暮らせるとは思うけど……

「ふたりとも相変わらず仲がいいわね。ほんとにいつ結婚しても、孫の顔を見せてくれてもいいのよ？ 若いおばあちゃんになるの楽しみだわ。それにわたし、奈々ちゃん以外のお嫁さんなんて、きつとイビっちゃうわね」

おばが満面の笑みで恐ろしいこと言い出すから困ったものだ。

「もう、冗談もそのぐらいにしてよね」

だってわたしの心の中にはずっとカナちゃんがいる。けれどもその名前を今は出しづらかった。

もう随分長い間、この家の中でカナちゃんの名前を聞いていない。彼の名前が出るたびに、おばが話題を変えるから、段々と誰も彼の話題を出さなくなっていた。これまでは連絡がないことに落ち込むわたしを気遣って話を逸らしてくれていたのかと思っていたのだけれど、そうじゃなかったんだ。

「それとも奈々生は、誰か好きな人でもいるのか？」

慎兄がいきなりその話題を口にして、思わず冷や汗が背中を流れた。

「べ、別にいないけど……」

カナちゃんに今日逢ったことは内緒だと言われている。だから今、話すわけにはいかなかった。

「奈々ちゃん。慎一と結婚して子供ができて、わたしたちが面倒見るから安心して外に働きに出ていいのよ。今からその時が待ち遠しいわ」

「おばさん……」

すでに孫のことで頭がいっぱいになっているようで、その妄想は留まるところを知らない。
 「それで、明日来るんだろ？ その、新しい上司とやらは」

呆れたおじが助け舟を出してくれた。
 「そうなの。だから明日もすこし早めに家を出るね。上司より先に着いてなきやダメだ
 ろうから」

「だったら会社まで車で送ってやるよ。俺も朝から奈々生の勤め先近くの取引先に行か
 なきゃなんねえんだわ」

へえ、珍しいな。慎兄が送ってくれるのって、なにかのイベントの時以外なかったのに。
 「はいはい、ついででも助かるよ。ありがとね、慎兄」

滅多にないから甘えておこう。電車だと一時間かかるけれど、車だと三十分で済む
 から。

3 好きになってはいけない人

「気が重いな……」

月曜日の朝、わたしは誰もいない役員執務室で新しい上司が到着するのを憂鬱な気分
 で待っていた。

昨夜はカナちゃんとの再会できたうれしさと、今日の初顔合わせの不安とがごちゃ混ぜ

になって、よく眠れなかった。

義姉の婚約者と仕事なんてうれしくないに決まっている。真木先輩は網嶋さんのこと
 を悪くは言わなかったけれど、義姉を婚約者に選んだ時点で好感は持てない。

それでも仕事は仕事。準備万端でアシスタント専用のデスクについて待っていると、
 執務室のドアがガチャリと開き、背の高い男性が入ってきた。

銀縁のメガネに黒い髪をふわりとうしろになでつけている。

先輩が好きそうな細身の三つ揃いスーツ。おそらくオーダーメイドのそれは、均整の
 取れたその人の身体に合っていた。スーツに関しては、わたしも先輩に影響されている
 のですこしだけうるさいかもしれない。

「はじめまして。本日よりアシスタントを務める上野奈々生です」

そう挨拶しながらゆつくりとお辞儀をする。秘書課研修でのお辞儀の指導は厳しくて、
 この角度とエレガントさを会得するのはなかなか大変だ。

なのでそのことはかりに気を取られ、あまり彼の顔を見ていなかった。

ゆつくりと頭を上げると、その人がやさしげな笑みを浮かべながら歩み寄ってくるの
 が見えた。

あれ？ 黒い髪にメガネをかけているのですぐにわからなかったけれど、この人つ
 て……

「カ、ナちゃん？」

「言っただろう？ 奈々。すぐに逢えるって」

頬に押しつけられたスーツの硬い生地感触……。わたしはすでに彼の腕の中にいた。

「どうして……なんでカナちゃんが？」

一瞬、事態が理解できなかった。その間、抱きしめられたまま呆然として息を呑む。

わたしがここで対面するのは、新しい上司のはず。

それなのにカナちゃんがいるってことは……彼が綱嶋奏ってことなの？

—— そんな……カナちゃんが、義姉の婚約者だったなんて！

昨日再会できた時はうれしくて堪らなかった。だけど、今日はうれしくないどころか怖くなる。

「は、離して……カナちゃん」

慌てて彼の胸元を押し返し、急いで彼から離れた。

もし誰かに見られたら……そう考えるだけで一気に血の気が引く。

「どうした？ 顔色が悪いね。そんなに驚かせた？」

わたしは必死で横に首を振る。驚いたけれど拒んだ理由はそうじゃない。彼が義姉の婚約者なら、こうして抱きあうなんてダメに決まってる。

「どうして……綱嶋なの？ カナちゃんは水城奏じゃなかったの？ 下の名前だっ

て……！」

「亡くなった母の兄が綱嶋の社長だったんだ。養子になった時に名前の読みもそう、に変えたんだ……昨日は黙っていて悪かったよ」

「なんで昨日、そのことを言ってくれなかったのよ！」

カナちゃんが綱嶋奏になったと聞いていれば——昨日のキスを受け入れたりしなかったのに！

「ごめん。急いでたんだ。それに昨日は奈々が僕を待っていてくれたことがうれしすぎて……話す余裕がなかった。それに、会社で話したほうが現実味があるだろ？ 僕が綱嶋だって」

確かにそうだけど、まさか……知らなかったの？ わたしが自分の婚約者の義妹だっ
てこと。

知らずに逢いに来たの？ アシスタントにしたのも、わたしが幼馴染だったから？

「怒ってるのか？ 待たせてごめんよ。だけど、これからはずっと一緒にいられるから」

これからも一緒になって……仕事上はそうかもしれない。だけど婚約している身でありながら、どうしてそんなことが言えるの？ わたしならなんでも言うことを聞くと思っ
た？ 義姉を妻に迎えて、わたしを愛人にでもしようっていうの？

「奈々？」